

そんなよく出来た子に、アホみたいな下ネタは、なんか、言いづらい。

オレにとってジュードは、憧れの存在で、高嶺の花で、

かつ、敗北感を覚える苦手な相手だから。

ねえ、したいんだったら、僕が又いてあげようか？」

けれどもジュードは、オレが何を思っているのかなんてお構いなしに、

そんなことを言ってくる。

「ハア!？」

あまりな言いように、オレの口から再び、マヌケな声が出た。

キミは、何を言っているんだあああ!?

冗談だよね？

からかつてるんだよね？

にしても、キミの口からそんな冗談が出てくるとは夢にも思わなかったよ！

ジュード、もしかして、酔ってる………？

なんて、オレが内心、あたふたしている間にも、

だって、したいんですよ？」

「あっ、ちょっと、何して……」

ジュードの手が、オレの股間に伸びてきた。

「ほら、おつきくなってる」

ジュードは片方の手でアソコを握り、もう片方の手の指を頬に添えてきた。

そして視線は下に向けて、艶っぽく言ってきた。

「や……」

ジュードに視線を向けられているそのは、

ズボンの上からでもはっきり分かるくらい大きくなっていた。

オレの口から、思わず甘い声が漏れる。

ヤだ、恥ずかしいよ。。。

ジュードお……

ジュードの手、意外と大きくて、あつたかくて。

ズボンの上からでもキミの体温が伝わってくるの、ヤバイ！

あまりに恥ずかしくて、オレはきゅっと両目を閉じた。

ら。

可愛い」

と、ジュードが意地の悪い笑みを浮かべた気がした。

目を閉じているから、表情は分からなかったけど。

って！